

2016. 3. 20

No.194



編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)

愛・平和・生命（いのち）を歌い続ける

吉岡しげ美コンサート開きます

3月も半ば。雪解けが進み春らしい陽気になってきました。みなさまはお元気でおすごでしょうか？

3月9日に、稼働中の高浜原発差し止めの仮処分決定が出されました。原発に隣接する滋賀県の住民の「琵琶湖を守りたい」の声が届いたことに勇気づけられました。

安保法制が通り、こんなにも戦争が身近に感じたことはありません。夏の参議院選挙では戦争させない野党共闘の候補に是非勝利させて、安保法制を廃止にしたいですね。

吉岡しげ美さんは「愛・平和・いのち」をテーマに茨木のり子、金子みすゞ、与謝野晶子、知里幸恵など女性詩人の詩に、しげ美さんが曲をつけて、弾き語るコンサートを続けてきました。今年は39周年になります。

私としげ美さんとの出会いは2003年です。そのころ、知里幸恵記念館を作ろうと活動、していたのですが、しげ美さんが「銀のしずく降る夜」の作曲をされた縁で札幌にいらしてくださいました。

茨木のり子の「わたしが一番きれいだったとき」や金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」などをピアノで弾き語りました。詩にこめられた戦争への

怒りが、心深くにしみ込んできて涙があふれました。いつかまた、札幌で聴きたいとずっと願ってきました。でもコンサートを企画するには勇気が必要でした。しげ美さんは「銀河通信」の長い読者でもありました。

しげ美さんの半生が綴られた著書「わたしらしく輝く幸せ」を読んで、決心がつきました。本の紹介は189号(2015.5.25)にありますが、その時に書いた文章の一部を抜粋します。

15歳の時に経験した父親の死、出産、夫の病気などの転機を迎えては自律神経失調症に悩まされたこと、乳がん手術の体験など、体の不調と向き合って乗り越えてきたことを率直に語っています。

本書には、女性の自立や、自由、反戦をうたう女性詩人の思いに共感した自身の歩みがつづられています。しげ美さんが音楽活動を始めた頃には、露骨な女性差別があったと書いています。男の作詞したステレオタイプの女にうんざりし、そこで出会ったのが女性詩人の作品だったのです。

「本音で、自然に自由に生きることは、女にとっても男にとっても、そして子どもにとっても、疲れてさびしく孤独なものかもしれませんが、でもそれぞれの年齢を、愛おしく精いっぱい生きなければならぬと強く思います」と書いています。多くの女性が社会や家庭で闘ってきたのではないのでしょうか？自分で道を切り開いてきた、しげ美さんに共感しました。しげ美さんの歌が心に響く訳が理解できたように思います。

私も「自分らしく生きたい」と願いながら「銀河通信」にその思いを書いてきたように思います。

6月3日(金)是非、ふきのとうホールをいっぱいにしてしげ美さんを迎えたいと思います。詳細は8ページをご覧ください。



民主主義ってなんだ！？ SEALDs 奥田愛基さん・殿垣くるみさんが語りました

さっぽろ自由学校「遊」25周年記念フォーラムが2月20日（土）に北光教会で開かれ300人が参加。SEALDsの奥田愛基さん、殿垣くるみさんが基調講演。その後5人によるパネルトークがありました。

私は受付に入ったため、聞くことができず後日「遊」監修のDVDと友人のボイスレコーダーをお借りして、書き起こした要旨です。



＜奥田愛基さんの発言＞

（写真・自由学校「遊」提供）

コンビニでアルバイトしていたが、なんだか世の中おかしくなっていると感じていた。身近では奨学金をもらっても将来返せないような1千万も社会に出て返さないとならないのはどう考えてもおかしいと思った。

3. 11の東日本大震災後、ボランティアに通って、この世の中おかしいんじゃない？と強く思った。原発はないほうがいいし、戦争もないほうがいい。それまでは「反対もわかるし賛成もわかる」と物事を相対的に見る癖がついていたけど、今やそういう時代ではないと思いました。

デモは「民主主義ってなんだ！？」と考えるところから始まった。以前は国会の中に民主主義があると思っていた。でも国会の前に民主主義があるというのがみんなの感覚でした。

仲間とはいつもケンカしながら「もうお前とは一緒にやらない」などと言っては、また次の日一緒にデモに参加していた。何も組織だって行動していたわけではなかった。シールズは最初は10人ぐらいで活動していましたが、仲間の一人が国会前に30万人集めよう！などと言っていたが、その時集まっていたのが500人。ほんとに集まるのかと疑ったが、どんどんと広がっていった。7月には30万人が国会前に集まった。

デモでは何も変わらないという人もいるが、安保法案もぎりぎりのところで通った。9月の連休を越して審議していたらどうなっていたかわからない。そこまで政権は追い込まれていました。

沖縄・辺野古も同じでデモが続くから、政権も無視できない。デモを続けることの大切さを身をもって学んだ。市民社会の力だと思う。政

治は政治家にはまかせられない。

国連平和維持活動（PKO）での自衛隊の南スーダン派遣は8ヶ月延長になりました。今回の選挙はすごく大事です。難民キャンプでは毎日人が殺されている。駆け付け警護を認めると、国家として派遣されるのに自衛官が責任を持たねばならない。武器をもって参加するのだから、殺したり、殺されたりする。戦争と結びつきます。

今、米国では大統領選の指名者争いですが米国がシリアに1万人の兵士を派遣したら「日本の集団的自衛権を使わなければ何のために通したんだ」となります。

今は国家が戦争するか、しないかの瀬戸際です。声をあげ続けることが大事です。安保法制が通って、あんなに頑張った野党が元に戻ってしまった。どうせ勝てないからと尻込みしていたら、何も変わらない。ようやく北海道でも野党共闘がまとまり良かった。

活動を通して高校生たちが、個別的自衛権と集団的自衛権についてすらすらと言えるようになったのは驚き。「若い人は政治に無関心ですが？」とインタビューで前置きされるが、決してそんなことはない。若者にまるで発言権がないかのような質問は疑問です。

国家とは何かと考えてしまう。自分たち国民が幸せに暮らせるようにするのが国家の役割であって、国民が国家のためにあるのではないと思う。

＜殿垣くるみさんの発言＞

私は普通の学生。何も変わった学生ではありません。戦争はいやだ、殺したり殺されたりしたくないというあたりまえの日常を守りたいだけです。シールズには社会問題に関心があったから入りました。

シールズは個人として一人ひとりが立っているから、広がりをもつことができました。安保法制は命にかかわる問題だと思った。立憲主義を守れとか自由を守れとか、普遍的な価値観に気が付きました。先人が守り抜いてきた70年の重みを感じました。

シールズで未来をあきらめないと決意した仲間と出会えました。シールズの活動はこれから同じように続くのかはわからない。でもその精神は私たちが受け継いでいきたい。

公開フォーラムでは「親子で憲法を学ぶ札幌の会」共同代表の安斎由希子さんは原発なくそう、TPPなくそうと活動してきた。特定秘密保護法や安保関連法も憲法を守ることにつながっていると、学んで知りました。まずは憲法を読むことから始めませんか？

私は子どもたちにいい未来を残したい」と訴えました。

「アイヌ・先住民族電影社」代表の阿部千里



写真・パネリストのみなさん

さんは「アメリカの大学に留学して、経済格差の裏側にある人種差別を学びました。生まれながらの条件、黒人であるとかアイヌであるとかで不利になることが許せない。自分はどうかだと思った。自分の仲間であるアイヌの人たちのための仕事をしたいと思った。それが使命だと。先日、ジュネーブで開かれた国連の女性差別撤廃委員会に出席しました。先住民とマイノリティとは違います。なかなか理解してもらえなかったけれど、共通の理解を持つのが大事だと思いました」と語りました。

北海道新聞編集委員の往住嘉文さんは「朝日新聞が火だるまになっていた時、他紙も慰安婦問題を書かなくなった。北星問題について私も書きましたが掲載されなかった。週刊金曜日が何度か北星問題の特集を組んでくれた。小さなメディアが奮闘したのです。新聞は『権利の闘争』がとても大事だと思う。たくさんの方がどんどん書けば、トップは無視できない力になると思う」と語りました。

真剣に考え、行動する奥田さん、殿垣さんのお話から、民主主義を取り戻すには一人ひとりが行動することが大切だと改めて学びました。

原発のコスト高い

大島堅一さんの講演から学ぶ



泊原発の廃炉をめざす会の講演会が3月6日（日）にあり立命館大学教授大島堅一さんが「原発の電力を選ばない！これが私たちの選択」についてお話しされました。

大島さんは 岩波新書「原発のコスト」で大佛次郎賞を受賞されています。

大島さんは、福島第一の収束や損害賠償に13兆円がかかると試算しました。もし泊原発で事故が起きたら、事故の収束は不可能と断言されました。一兆円ものお金を北電が調達するのは難しいからです。原発の立地自治体への交付金や技術開発費が国民の税金で賄われています。

原発の費用が安いと電力会社が強調するのは事故の費用やコストを国民に転嫁しているからです。

また北電の電力が高いのは石油に頼っているからとも言います。

原発に頼らない電力を選択したドイツの例を紹介。バイオマス、水力、風力、太陽光で電力を賄っています。

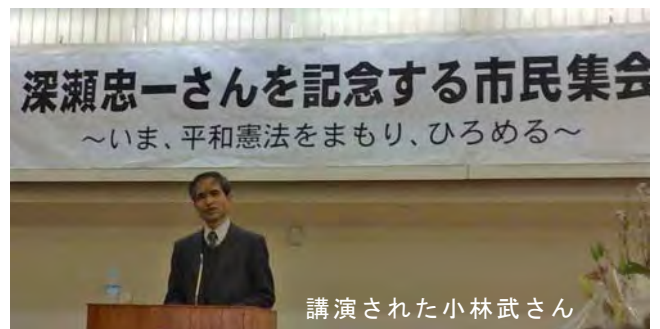
風力も人が暮らすところから離れた場所を選び、環境にも配慮しているそうです。

とかく経済の問題は難しいと敬遠してきましたが、なぜ原発をゼロにする必要があるのかがとても理解できました。

4月から電力小売り自由化が始まります。北電と、再生可能エネルギーで発電する会社が競争すれば変化の可能性があります。選ぶのは私たち市民です。

原発のない暮らしを選びたいと大島さんのお話から勇気づけられました。

深瀬忠一さんを記念する市民集会 ～いま、平和憲法をまもり、ひろめる～



講演された小林武さん

私もこの集会に参加していましたが読者でもある福原正和さんからご寄稿いただきました。

1月23日札幌クリスチャンセンターにおいて、昨年10月に88才で亡くなった北大名誉教授（憲法学）深瀬忠一氏を偲んで上記の会が開かれました。深瀬氏は北大の前身・札幌農学校の先輩である内村鑑三・新渡戸稲造の精神を受け継ぎ、憲法9条を守ることに生涯をささげたと言っても過言でない生き方をされました。深瀬先生の遺志を受け継ぐ集会をしたいと、恵庭事件の小さな記事を最初に見つけて北大の学生時代、深瀬先生に知らせた笹川紀勝国際基督教大学名誉教授の呼びかけで実行委員会が始まったものです。

会場正面には花とともに深瀬先生の写真、壁には深瀬先生が書いた絵や、野崎牧場での道平・道キ平会員と一緒に写真などが飾られ集会は117名という予想を超えた参加者で補助いすを出すほどでした。札幌市内だけでなく、道外からも深瀬先生と交流のあった憲法学者や弁護士が何人も参加されました。

小林武沖縄大学客員教授から「深瀬先生のお仕事から今学ぶこと」と題し約1時間の講演と、深瀬先生と所縁のある独立教会小野善康岩手大学名誉教授、野崎健美恵庭事件元被告、橋本左内北海道キリスト者平和の会（日

本宗教者平和協議会)、深瀬先生が東京で洗礼を受けた学生時代を知り、札幌で靖国神社国営化阻止運動をしている野村永子さん、「平和に生きる権利」を共に研究されてきた山内敏弘一橋大学名誉教授、そして若手として清末愛砂室蘭工業大学准教授がスピーチを行いました。

講演者の熱のこもった話が続き、予定の2時間を30分ほど延長しましたが、参加した中村元北大総長など数名から「良い集会でした」との声が寄せられ、児玉健次元衆議院議員から「大変良い集会でした、国会論戦で参考にさせていただいた小林武、山内敏弘お二人の話が聞けて良かったです」とのお電話をいただきました。

懇親会も同会場で約40名の参加で、深瀬先生を偲び交流の輪が広がりました。患庭事件元被告野崎健美さんはお元気で「わたしの遺言と思って聞いてほしい」とメッセージを配られておりました。

懇親会が終わる頃、元朝日新聞記者で「従軍慰安婦」報道で様々なバッシングを受けている植村隆さんが駆けつけられました。患庭事件に関わり北海道キリスト者平和委員会(道キ平)創設にもかかわった西森茂夫さんが、故郷高知県の土佐高校の教員だった時の教え子で、西森氏の影響もあり、その後朝日新聞の記者になり、深瀬先生にも土佐出身の先輩として取材もしたとお話しされていました。

私自身今回の集会に関わる過程で、深瀬先生が札幌農学校のクラーク・内村・新渡戸・宮部らの精神を受け継ぎ、人生をかけて平和の為に活動してきた事を改めて学び、少しでもその遺志を継ぎたいと考える機会となりました

集会資料には「弁論・理論・世論が一体となる運動が大切」とまとめられた長沼一審判決30周年記念集会での深瀬講演内容が提供され、内藤功氏や福島重雄氏からのメッセージも紹介されました。

次女深瀬ふみ子さんから「父が大事にいつも胸に入れていた写真です」と深瀬氏も中心となって創立した北海道キリスト者平和の会の若い会員との飲み会での写真が提供・掲示されていました。深瀬先生は若い人たちとの交流をいつも楽しみにしていたようです。

集会は道キ平の若い方々の協力で無事終了することが出来ました。(福原正和)



撮影・池端耕治さん
野幌森林公園のフクロウとシマエナガ



私たちには生きる意味がある

『あん』上映会とドリアン助川さんの講演会要旨

3月12日、札幌映画サークルの「あん」上映会とドリアン助川さんの講演がありました。入会したばかりでしたが午前、午後の2回の受付を担当しました。会場の札幌プラザは超満員。映画は昨年観ていますが、受付後、一番後ろの補助いすで観ました。

ハンセン病の元患者と、中年のどら焼き職人の交わりを描いたドリアン助川原作、河瀬直美監督の映画です。第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門のオープニング作品に選ばれ日本国内でも約150館で上映、世界50カ国でも上映されました。すごいですね。(先日の朝日新聞、逆風満帆でも紹介されてました)

映画の中で徳江さんの語る言葉「私たちはこの世をみるために、聞くために、生まれてきた。・・・だとすれば、何かになれなくても私たちに生きる意味があるのよ」に涙がとまりませんでした。昨年お会いした森本さんから、病を隠して大学に通った話は聞いていましたが製菓部のことは初めて知りました。

ドリアン助川さんのお話

道化師に扮してギターのライブを始めました。お年を召された男女3人が最前列にいた。終わって聞いたらハンセン病療養所の「多磨全生園から来ました」と言う。そこで初めて元患者さんたちと出会ったんです。「療養所に遊びにいらっしやい」と誘われて行ってみたら、びっくりしてしまいました。指が曲がっている人たちがいる。そこで森本美代治さんから、ハンセン病の歴史などを始め、いろいろ教えていただきました。

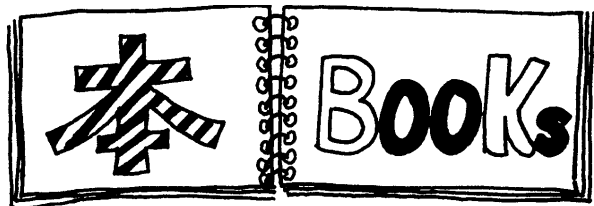
森本さんは中学生のときに発病して、療養所を転々とするんですが、岡山に日本で唯一あったハンセン病患者の子供の高校に入学するとき客車でなく貨車に載せられて広島駅で消毒薬を頭からかけられる。その後、東京の全生園に移って、12人の雑居部屋でしつけなど厳しく教えられた。その厳しく教えた人が製菓部のおじいちゃんだったんです。療養所は、火事になっても消防が来てくれない「ミニ国家」だから、手に職ある人が「国家」を支えていかなくちゃいけない。たぶん菓子職人だった方を中心に、患者さんの誕生日や盆と正月に、甘いものをつくる「製菓部」という集まりをつくっていた。

私はその頃パティシエの小説を書こうと製菓学校に通っていて、一般教養であんこも作っていたから初めて「書ける」って思った。そこから「あん」が生まれました。

生まれてから死ぬまで療養所から出ることがないとしても、花や木や鳥を、宇宙を真剣

に受け止め続けた人生があったら、それは無意味ですか？宇宙的には、あっぱれな人生じゃないか。療養所に閉じ込められてしまった人生でも、垣根を越える心を持って、月や木と話をする人がいたら、すばらしいと思う。私はハンセン病を通して生きることを意味を問いたかったのです。この世に生まれてきた意味があるのではないかと。

2015年6月にカンヌのオープニングを迎えました。生きて人間だけじゃなくて、いろんなものが、後押ししてくれたような気がします。全員、壇上に上がってスピーチしましたが拍手が5分ぐらい鳴りやまなかった。希林さんが「拍手している人たち、手が痛いでしょ」と言って、舞台から下がっちゃったので終わりましたけど。カンヌから2週間で40カ国で上映が決まりました。嬉しかったのは、地中海にある小さな島、マルタの映画祭で作品賞と主演女優賞を取ったこと。まったく違う人種、文化で、審査員の満場一致。観客の熱気が後押ししてくれていた。たぶんマルタの人はどら焼きなんて見たことないだろうけど、人の命とは何かという普遍的なところで、河瀬さんの作品が伝わっている。徳江さんの気持ちが国境を越えたんだと思う。映画ではカットされたシーンも多ありますが、完全版は朗読劇でやっています。中井貴恵さん演じる徳江さんは、また違ったよさがあります。全国を回って公演するつもりです



私のシュプール1 ハガスキーの歴史と私の登山

芳賀孝郎著 北海道新聞社事業局
出版センター1500円

芳賀孝郎さん、淳子さん夫妻とは、同じ山岳会の会員で親しくお

付き合いさせて頂いています。

本書は北海道の老舗スキーマー・ハガスキーの2代目社長を務めた芳賀さんが、北海道のスキーの歴史と、自身の登山、および国内外の登山史に名を残す登山家たちとの交流を描いたエッセイです。

芳賀さんはあとがきで、「私の人生はきれいなシュプールではない。それは挫折を経験した印である」と、学生時代に山岳部の4人の仲間を失ったことと、ハガスキーの倒産について記しています。そのたびに運命的な人との出会いで窮地を脱してきたとあります。

加藤泰安さんとの出会いによって、芳賀さんはチョゴリザ登山隊の一員として参加、登頂しています。遠征隊長は桑原武夫先生でした。毎晩のように文化講演を聴くことができたことと記し

先生の深い学識や経験からほとぼしりである哲学や人生観、文化論から世渡りの方法まで実に多くのことを学んだとあります。

戦前、北大に留学していた民俗学者であり登山家でもあったフスコ・マライーニや、イタリアの有名な登山家ボナッティとの交流など、著名な登山家の名前が本書には次々と出てきて多彩な交遊録に引き込まれました。

芳賀さんのおおらかな人柄と、知的好奇心の旺盛さが、登山家であろうと、市井の人であろうと受け止める大きさにつながっているように思いました。カバー装画と挿絵を淳子さんが描いています。

本書の問い合わせ、購入は芳賀孝郎さんの携帯090-4837-7654 tel&fax011-642-6086 メールjthaga@r7.dion.ne.jpまで。

真実 私は「捏造記者」ではない

植村隆著 岩波書店 1800円



1991年に元慰安婦について書いた1本の記事が、23年後に元朝日新聞記者植村隆さんの

人生を変えました。「捏造だ」と攻撃され、植村さんが非常勤講師を務めていた北星学園大学や家族も脅迫されました。

市民の支援の広がりや全国、アメリカ、韓国にと広がりました。植村さんは、アメリカの6大学で講義もしました。名誉を傷つけられたとして、東京と札幌で訴訟を起こしました。弁護士が106人というのも異例のことではないでしょうか？ 慰安婦問題をなかったことにしようとする歴史修正主義に真っ向から立ち向かう植村さんの支援を多くの人に呼びかけたいと思います。

3月から韓国カトリック大の客員教授に就任が決まった植村さんは、「日本と韓国の架け橋になりたい」と2月に開かれた激励会で決意を述べました。慰安婦問題は、教科書の中だけにある過去の歴史ではない。悲しみやつらい記憶を抱えた人がまだ何人も残っている。一人一人と交流し、生の声を伝えたい」とも語りました。

最後の章では「苦しい時期も長かったが、逆境の中で、支えてくれるたくさんの『まことの友』を得た。旧知の仲間たち、大勢の市民の方々、弁護士、学者、ジャーナリストの仲間たち。もし植村バッシングがなければ、こんなにもたくさんの『まことの友』たちと会えなかったはずだ。試練は、出会いという恵みを私に与えてくれた。(略)これからも、闘っていく。決して屈しない」と結んでいます。

著書の印税はすべて裁判費用になります。是非買って応援してください。

キューバ 超大国を屈服させたラテンの魂



伊藤千尋著 高文研 1500円

キューバとの付き合いが40年を超すジャーナリスト伊藤千尋さんが明解に読み解くキューバの現在、過去、未来。

日本の報道はアメリカからみたキューバが多いなかで、ここには真実のキューバがあります。

米国は武力と経済制裁でキューバをつぶそうとしましたがキューバは屈服しませんでした。中南米の国々から反発されて孤立したのは米国でした。そうだったのか？と目から鱗でした。

理想を追い求めたゲバラの「アスタ・ラ・ビクトリア・シエンブレ」(永遠なる勝利の日まで)はゲバラを象徴する言葉です。

カストロに対してCIAの638回もの暗殺計画があったことも明かされています。運の強さとそんなことに動じないカストロの楽天性にも驚かされました。カストロのいくところ、いくところで、気軽に声をかける民衆がいて、政治が生活の中に根付いているかがわかります。一党支配ではあるけれど、カストロ自身が国民に直に接して、その思いをくみ上げて政治に反映していると言います。「キューバ流の直接民主主義」を実践していて、よっぽど、日本の安倍政治よりまともです。

ホームレスがない国。強盗がないし、治安もいい。医療や教育が無料だから生きていく保障があり、弱者も安心して暮らせます。

決して豊かな国ではないけれど、楽天的なラテン主義で踊って抵抗したキューバの人々の強さが素晴らしい。

あとがきに「キューバが日本と違うのは、国家の自立だ。(略) 小国キューバがいち早くそれも半世紀以上にわたって毅然として米国に対峙してきたことがまぶしく思える」と記しています。

伊藤さんはキューバのすべてを肯定しているわけではないけれど、人間が解放された世の中を目指して努力し闘ってきた歴史を知りたい。キューバを訪れこの目で確かめたいと思いました。本書のおかげで、我が家はにわかキューバブームで、スペイン語の勉強を始めました。

今こそ問われる市民意識 わたしに何ができるか

伊藤千尋著 女子パウロ会 1400円

本書は市民の時代、平和、憲法、社会、世界から、人生、原発の7章からなり、世界や日本の問題を取り上げ、暮らしやすい社会建設のために生きている人々の姿を紹介しています。

伊藤さんのフェイスブックで紹介されていて装丁の美しさに惹かれて取り寄せました。



伊藤さんはコスタリカの学校を訪ねたとき教師に「あなたの教育の目的は何ですか？」と聞くと「教え子が卒業と同時に、自分の頭で考え、自分で自立して生きられるような人間を育てることです」という答えが返ってきます。日本はどうだろう。「正しいとされる答え」を覚えこむロボットのような人間を作り出しているのではないかと伊藤さんは問いかけます。

社会が破滅に向かうのは、おかしな政治を国民があきらめて放棄したとき。今必要なのは声を上げること。生き生きと、社会を変えようと努力している人々から大きな励ましをもらいました。申し込みは伊藤千尋さん zvc06324@nifty.comへ。



あなたという国 ニューヨーク・サン・ソウル

ドリアン助川著 新潮社 1500円

ミュージシャンとして成功を夢見る拓人と、脚本家となり夢の物語を紡ごうとするユナ。日本人と韓国人の障壁も乗り越え世界を共有していく。だが拓人の道が開けかけた時、9.11同時多発テロが起きます。

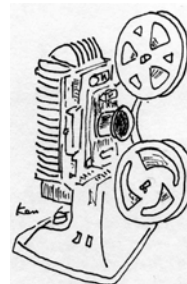
ドリアンさんが音楽家をめざしてニューヨークで暮らした体験から生まれた小説です。新聞のインタビューに「テロにより、本来ありえたはずの可能性が奪われたことに思いをはせた。何年かのちに生まれるはずだった何万人、何十万人もの人々が消えてしまった。戦争やテロは、何かになるうとする可能性すら奪うのです」と語りました。

あり得たかもしれない別の世界がリアルで素晴らしいものであればあるほど、あり得なかった現実には悲痛です。思いもかけなかったラストに胸が震えました。イマジンの世界がそこに広がっていました。

9.11同時多発テロを体験したドリアンさんの非戦の思いが深く刻まれた本でした。

ザ・ウォーク

アメリカ ロバート・ゼメキス監督



1974年、フランス人プティがニューヨークの世界貿易センタービルのツインタワーを命がけの綱渡りをした実話です。

9.11にテロで失われた建物へのレクイエムです。当時の街をCGで再現しているのも見ごたえがありました。

パリで大道芸人をしていた時に、街頭で歌

う学生と恋に落ちます。

ニューヨークのツインタワーが完成近いと知り、頂上から綱渡りを思いつきます。世界一の綱渡り師に技術を学び、タワーを徹底調査し、計画、実行するまでの仲間との関係プレーも、チャレンジ精神にあふれて素晴らしい。プティの夢を支えた愛や友情も描かれ、青春映画としての魅力にもあふれていました。

タワー間42mの空中ウォークに私も立ち会っているような臨場感がありました。眼下に広がる絶景に息をのみます。

9.11テロの犠牲者とツインタワーに追悼の思いを込めた作品でもありました。

サウルの息子

ハンガリー ネメシュ・ラースロー監督



1944年10月、アウシュビッツの収容所にヨーロッパ各地からユダヤ人を満載した貨車が到着するところから始まります。

サウルはユダヤ人囚人の中でもナチスに選ばれて特別任務を負ったゾンダーコマンドでした。一日に数千人もの大量虐殺を行うために同胞らを安心させてガス室に送り込むのがゾンダーコマンドの役目でした。

ガス室から聞こえる阿鼻叫喚。ドアをバンバン叩く音など。サウル以外は死体の山もぼんやりしか見えないのですがアウシュビッツの生き地獄を、私たちもその場に居合わせたかのように体験します。

ある日、サウルは殺された少年を自分の息子だと思い込み、ユダヤ教で埋葬をしようと息子を抱えて聖職者を探し回ります。

映像は四角に切り取られ、サウルの気持ちを深く描くことで、逆に見る人に、描かれていない部分を想像させるのです。サウルが息子をきちんと埋葬したいと奔走するのは、人間として存在するための尊厳をかけた闘いでした。

監督はゾンダーコマンドが収容所に隠したメモ等を読み込んで殺された者の視点で、アウシュビッツの悲劇を伝えようとしたのです。殺人工場を止めようとした人々のレジスタンスも描いています。

2年前、アウシュビッツを訪ねました。ビルケナウ収容所の、殺人のためにだけ存在した粗末な建物から、今も人々の叫びが聞こえてくるように感じたことを思い出しました。

歴史から学ぶことで未来に向かって歩めるのだと、この映画は伝えています。迫害の中の人間性を描いた映画は必見です。昨年のカンヌ映画祭でグランプリを受賞。ネメシュ監督は38歳の新人です。

アウシュビッツ博物館で唯一の日本人ガイドの中谷剛さんの著書にはゾンダーコマンドの生き残りの方の証言があります。「今起きていることを真剣に受け止め一致団結して対処しないと化け物が勝利を収めることになるかもしれない」。今の日本の状況がまさにそうではないでしょうか？

国際市場で逢いましょう



韓国 ユン・ジェギ
ユン監督

朝鮮戦争やベトナム戦争に巻き込まれながら、激動の時代をただ家族のために必死に生き抜いた一人の男の生涯を描く

大河ドラマ。

昨年見逃して、映画サークルの上映会で観ることができました。

朝鮮戦争で、父と妹と離れ離れになりながら、母と残された2人の弟妹とともに避難民として釜山で育ったドクス。ドクスは家族の大黒柱として必死で働きます。西ドイツの炭鉱に出稼ぎに行き、重傷を負ったり、ベトナム戦争で技術者として働き、生死の瀬戸際に立たされます。生きてこられたのが奇跡とも思えるほどの過酷さでした。初恋に泣き笑いし生き別れた父との約束を守って、自分を捨てて家族のためにひたむきに働くドクスの姿に、ずっと泣きっぱなしでした。

ドクスが「こんな苦勞を子どもらに味あわせなくてよかった。自分でよかった」と語るシーンが胸に突き刺さりました。

韓国の現代史を、歴史的検証を重ねて見せてくれると同時に、若い人にも共感できるキャストにも気を配っています。

多数の国民が犠牲になった朝鮮戦争。平和に生きられることのありがたみを実感しました。

フランス組曲

イギリス・フランス・ベルギー
ー合作 ソウル・ディヴ監督

アウシュビッツで亡くなったユダヤ人作家イレーヌ・ネミロフスキーの未完の小説の映画化。

フランス人女性と



ナチスドイツ将校の許されざる愛を軸に、過酷な状況の中で必死に生きる人々の姿を描き出します。

パリが陥落し、田舎町ピュシーはドイツ軍に占領されます。戦争の時代に奏でられる、美しいピアノの旋律。青年将校ブルーノの部屋からピアノの音色が流れてきます。美しさと儂さと心の気高さを感じるメロディー。音楽を通じてリュシルとブルーノは心を通わせます。一方で隣人を密告する手紙の山には戦慄しました。

リュシルは命がけで、パリの抵抗組織へと農民の逃亡を助けます。あの時代に葛藤しながらも自らの良心に従った兵士がいたことに救われました。ナチスだからと類型的でなく多面的に描かれていたのがよかったです。

極限のなかで、書き続けた著者の人間への信頼と尊厳を守り抜いた気高さに涙があふれました。

マリーゴールドホテル 幸せへの第二章

イギリス・アメリカ
ジョン・マッデン監督



インドの長期滞在型ホテルにやって来たイギリス人シニアたちが織り成す人間模様をユーモアたっぷりに描きます。

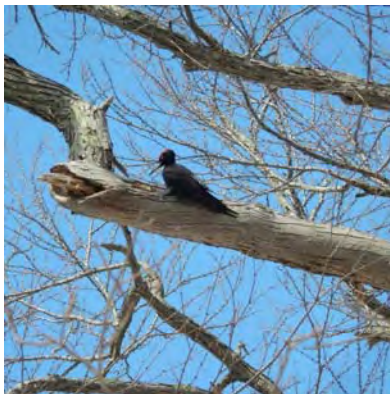
毎朝の点呼でシニアたちの「生存確認」をしてくれる親切なホテル。イヴリン（ジュディ・デンチ）は79歳にしてビジネスチャンスを手にするが、互いに好意を抱くダグラスとの関係を前に進められない。辛らつなミュリエル（マギー・スミス）はホテルのマネージャー。5人それぞれが第二の人生に奮闘します。一方、若きオーナーのソニーはホテルの拡大と恋人との結婚という2大イベントを前に、次々と問題を起こしてしまう。そんななか、アメリカからやって来た謎の男チェンバース（リチャード・ギア）の存在が、女性陣を色めき立たせます。

人生はまだまだこれから。エールを送られているような気持ちになりました。

若い二人が紆余曲折を経て、結婚パーティを開きます。インドらしく、歌と踊りが、華やかで圧巻。

これからの時代、若い世代と、人生経験豊かなシニア世代がこんな風に交流できたら楽しいなと思いました。認知症になっていられませんかよ、きっと。

マギー・スミスとジュディ・デンチのかくしゃくたる演技が素晴らしいです。私もかくありたいです。



3月10日、春の陽気に誘われて、野幌森林公園を散歩しました。野鳥のさえずりがにぎやかでした。なんとクマガラがドラミング中。デジカメのズームで撮った一枚です。（み）

購読料とカンパをありがとうございます す（敬称略）1.22～3.17

坂井恒俊（旭川市）安田成男（札幌市）カンパ含む 安達紀利（札幌市）カンパ含む 木村玲子（札幌市）小寺弘子（札幌市）12号分 沼崎勝洋（小樽市）カンパ含む 久野真紀子（様似町）カンパ含む 斉藤淳子（札幌市）菅邦子（三鷹市）後藤言行（小樽市）宮本紀子（中野区）新妻徹（札幌市）カンパ 匿名（札幌市）切手30枚 宮原光恵（幌加内町）カンパ含む 守田恵美子（札幌市）カンパ 片山篤子（札幌市）新西幸司（札幌市）合計45,000円は印刷と送料に使わせていただきます。

お知らせ

平和のなかでいのち輝く 吉岡しげ美ピアノ弾き語りコンサート



東京在住の吉岡しげ美さんが、金子みすゞ、知里幸恵、茨木のり子、与謝野晶子・・・日本の女性詩人の詩に曲をつけて歌います。

平和への想い、生命への愛おしさを、あなたへ、そして星になったたくさんのあの一とへ・・・。

是非、たくさんの

読者と聴きたいと願っています。北海道は2度目。13年ぶりの札幌公演です。

原田公久枝さんの歌とトンコリ演奏もあります。

○日時：6月3日（金）

19:00～20:30（開場18:30）

○会場：六花亭札幌本店6階 ふきのとうホール

（札幌市中央区北4条西6丁目3-3）

○主催：吉岡しげ美弾き語りコンサート実行委員会（共催・銀河通信友の会）

○料金：前売り2500円 当日3000円

○チケット販売：大丸藤井、道新、教文の各プレイガイド、さっぽろ自由学校「遊」、みんなる、江別シアターども、実行委員会メンバー

○予約受付：樋口 090-6870-9225 又は minginga@agate.plala.or.jp に携帯番号又はメールアドレスをお知らせください。

後援は札幌市、札幌市教育委員会、北海道新聞社、朝日新聞北海道支社、知里幸恵銀のしずく記念館、さっぽろ自由学校「遊」です。

通信の発行を支えてください

印刷読者には100号から、年間6号分1000円の購読料で変わらず続けてきました。数年前からカラー印刷にしましたが、できるだけ安くネット印刷で継続してきました。

読者の購読料とカンパで、印刷代と郵送費に充てていますが、毎月1万ぐらゐの赤字が続いています。すでに振り込まれた方もいらっしゃいますが、今年の購読料がまだの方はお振込みいただけますようお願いいたします。

200号まであと6号になりました。なんとか苦しくても達成させたいと思っています。

web読者は無料ですがカンパも歓迎します。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535

ゆうちょ銀行19000-3310-9571

樋口みな子

-8- どうぞよろしくお願ひします。